想断々（2）

北村透谷

兵甲と国家

兵甲を以て国威を張るは変なり。兵甲は寧ろ国家を弱め、人心を危うするに足るも、以て大に国力を養ひ、列国に覇たらしむる者にあらず。国の本真は気にあり。気若し備はらば業挙らむ。凡そ業なくして勇を談ずるは、仮勇なり。業は以て地歩を堅うし、仮勇は以て自らを危うす。

請ふ米国を視よ

米国は迺ち業の国なり。始めより肯て国際間の武威を弄せず。而して各国之を畏る。何が故に畏るゝ、曰く、国民の元気充溢し、百般の業の上に其真勇を睹ればなり。敢て兵甲を以て天下に傲らず、而も諸強国に対峙して遜色ある事なし。

彼は迫らず

蓋し彼は悠々として強弱の外に濶歩しつゝあるなり。彼は匠工なり、建設する事を心に留めて他を顧みず。蓋し猛虎も餓ゆるが故に他を攫す、然れども何の日

か猛虎の全く餓ゆるなきを得む。猛虎の野に吼ゆるや、其音懼る可し、然れども、其去れる跡には、莫然一物の存するなし、花は前の如くに笑ひ、鳥は前の如くに吟ず。彼の匠工に至りては然らず、其建設する所一として空しきはなし。彼れ能く堅固なる鉄檻を作る事を知る、彼れ能く猛虎を捕ふるの術を知る。猛虎も遂に幾間の隘牢に甘んぜざるを得ざるの時なしとせんや。

憐れむ可きは戦病国

仏独相対して兵備日に厳なり。而して其中間に挿ま

れたる以太利（イタリー）は遂に如何（いか）ならむ。邦運久しく疲れて産業興らず。民多くは一種固有の疾疼（しつとう）に困（くる）しむ。而して国境を守るの兵は日に多く、痩（や）せたる民衆に課するの税斂（ぜいれん）は月に加ふ。先に拿翁の蹂躪（じうりん）に遭ひ、今後更に慮るところあり。昔日暴風雨を凌（しの）ぎ、疾雷閃電の猛威を以て、中原を席捲（せきけん）し去りたる夢は今何処（いづこ）にかある。平和の君、平和の君、切に此邦（このくに）を憐れまれん事を願ふ。

闘犬

戦ひに死して背（はい）を敵に向けず、其勇は実に嘉（よみ）すべし。

然れども戦ふ為に産（うま）れ、戦ふ為に仆（たふ）る可きは、夫れ仏国か。一大魔ありて人間界を支配するとせば、彼は仏国を以て一闘犬となしつゝあるなり。何となれば仏人は国利の為に戦ふよりも、寧ろ戦ひの為に戦ふ。平和、平和、遂に爾（なんぢ）を煩（わづら）はさざるを得ず。

（明治二十五年三月）

底本：「現代日本文學大系　6　北村透谷・山路愛山集」筑摩書房
1969（昭和44）年6月5日初版第1刷発行
1985（昭和60）年11月10日初版第15刷発行
初出：「平和　一號」平和社（日本平和會）
1892（明治25）年3月15日
入力：kamille
校正：鈴木厚司
2005年5月18日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。